



# ねじられても進む、 富山の富山の旅

日本一周の切符と、  
置いていかれた君と。



日本一周の

旅の準備は、  
少し丁寧すぎる  
丁寧にしてきた。



だが、出発早々、  
その「丁寧さ」は  
こしてから  
別の形で必要になった。



旅の準備は、  
少し丁寧すぎるくらい  
丁寧にしてきた。



富山の朝は、  
空気が少しだけ冷たくて、  
海の匂いが港の方から  
ゆっくり流れってくる。

富山の朝は、  
空気が少しだけで、  
海の匂い港の方から  
ゆっくり流れってくる。



泣き声は出さず、  
口を結んで耐えている。



両手は  
ふるふる。  
ふるふる。





“捨てられた”——  
捨てるのは簡単だ。  
置き去りは、  
心に穴をあける。

……おかあさん、  
いない。

あとで、って言って  
……あとで、こない

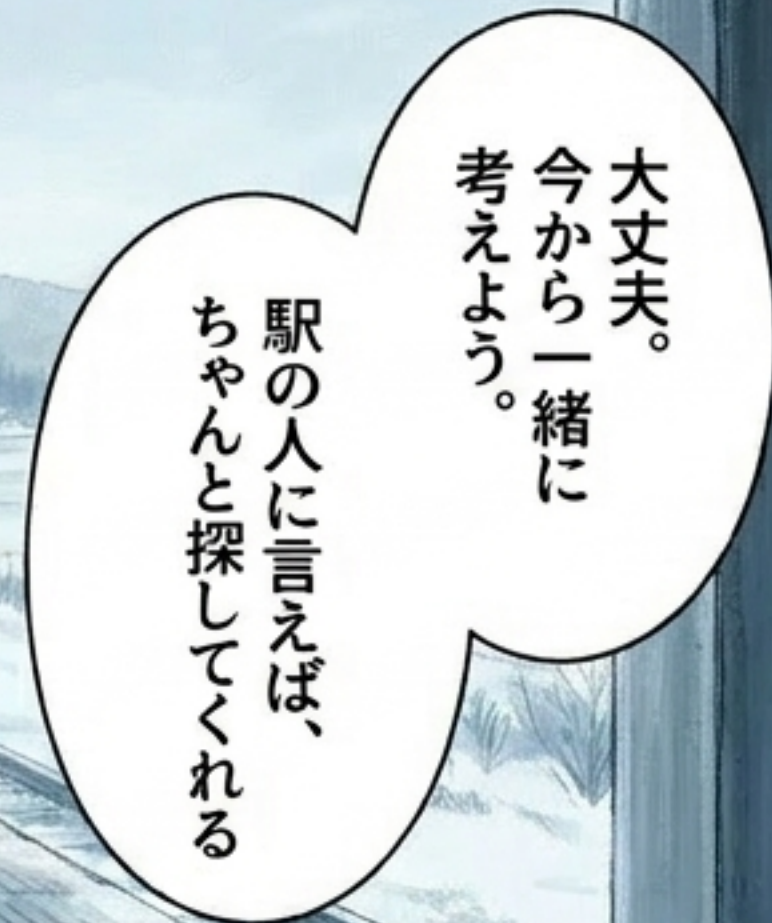


行き交う人は早く、  
冷たいほどに自然で。



……探してくれるの？

探してくれるよ。  
だから、君は一回、  
ここにしよう



大丈夫。  
今から一緒に  
考えよう。

駅の人に言えば、  
ちゃんと探してくれる



日本一周の切符。  
地図。宿の候補。  
宿の候補。

どれ、自身の  
選択である。

どれも、彼自身の  
選択である。

でも、  
目の前のこの子は  
選べていない。

選べなかった人を、  
選べる側の自分が  
放っておくのは――

あまりにも  
簡単すぎる。



君の〝どこか〝を  
見つけるまで、  
俺と一緒に移動する





……ぼく、  
いっしょに  
行っていいの？

ひつつですね



いいよ。俺は、  
旅がしたいだけじゃなくて、  
間が悪いときに  
人の役に立ちたい  
人のこのまわって思ってる









単に遠くへ  
行くことより、


近くの誰かを  
「置いていかない」ことが、  
いちばん長い距離になる。



旅の意味が  
増えたただけだ。



温度はまだ不安定で、  
けれど確かに  
人の温度だった。

An illustration of two young men sitting on a train. The man on the left is wearing a white t-shirt and a backpack, looking out the window. The man on the right is wearing a dark blue shirt and is looking at a smartphone. The train is moving through a landscape with green fields and mountains under a sunset sky. The text is written in vertical Japanese characters.

今日からの旅は、  
自分のためだけじゃない。  
玲の明日を、ちゃんと次へつなめの旅だ。  
日本一周は、  
まだ始まったばかり。  
もう確かに動き出している。  
けれど彼らの物語は、